

「賀川豊彦の教育論におけるスピリチュアリ
ティ、宇宙観、と倫理観の相補性」



第26回身心変容技法研究会+こころ観研究会
京都大学こころの未来研究センター
2014年7月29日（火）

「神々をつくるための機械である宇宙」

「事実、よろこびは、拡散した神秘的直感が世界中に伝播させる、生の単純さのことであろう。よろこびとはまた、拡大された科学的経験のなかで、彼岸の幻視のあとに自動的に続く単純さのことであろう。これほど完全な精神的革新が行われない場合には、さまざまな切りぬけ策に訴え、ますます侵入してくる「統制」に服し、障害物-われわれの本性が文明に対してさし向けている障害物-一つ一つ避けねばならないだろう。他が、抜本的な方策をとるにせよそうでないにせよ、どうしても決断することが必要だ。人類は自らなしとげた進歩の重荷（おもに）の下で、半ば押し潰され、呻いている。人類は、自分の未来が自分次第だということを十分に知っていない。人類はまず、自分が生き続けようとするか否かを見てみることだ。次に人類が自ら問うべきことは、自分はただ生きることを欲しているのか、それとも、そのほかに、宇宙-神々をつくるための機械である宇宙の一本質的機能が、反抗的なわが地球上でまでも、遂行されるに必要な努力を惜しまないのかどうか、ということである。」

「永遠の青年」、1933年

大きかったね
その輪郭は一
すっきりしてみたね
その肌合は
武士道に
世界魂を注入した
その気魂は
日本の島に容れるのには
少し大き過ぎたね
年と共に
若くなる
あの気持ちよい
靈魂-
どこから あゝした
若々さが湧くだらうかと
いつも感心させられた
永遠の青年！



『新渡戸稲造全集別巻』 教文館、一九八七

宗教教育に関する著作 『賀川全集』第6巻

- 「日曜学校教授法」 (翻訳、1915年)
- 「イエス伝の教え方」 (1920年)
- 「魂の彫刻」 (1926年)
- 「宗教教育の本質」 (1929年)
- 「宗教教育入門」 (1930年)
- 「自然と性格」、 (1933年)
- 「幼児自然教案」 (1933年)

賀川の人格主義的生気論的教育論

Kagawa's Personalist-Vitalist Educational Philosophy

—宗教、芸術、科学を統合する—

現在に関して：自然、芸術、瞑想と祈り

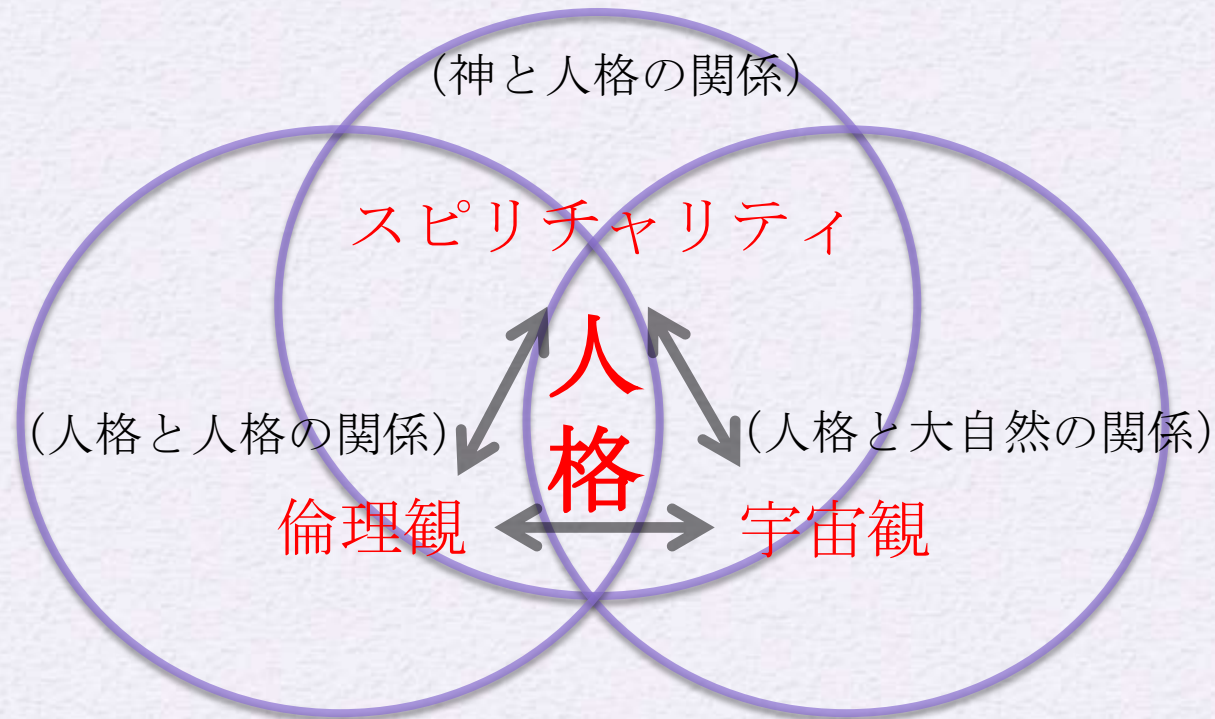
過去に関して：歴史

未来に関して：労作、博愛

「人格的接触はこの全てを包含する」

「自然と性格」、『賀川全集』第6巻、435

賀川の「動的宗教」による 「三角の福音理解」



「あらゆるものを全体から見る姿勢」
“Seeing all things whole”

賀川の科学的神秘主義

Kagawa's "Scientific Mysticism"

「私は科学的な神秘主義者だ。自分が科学的になればなるほど、深く神の領域を貫いている感じがする。特に生物学の分野において、まるで顔と顔とを合わせて神と対話しているようだ。機械的な世界においてさえも、生命を通して、私は目的を発見する。科学は神秘の神秘、天よりの啓示の啓示だ。」

“I am a scientific mystic. The more scientific I am, the more I feel that I am penetrating deeply into God’s world. Especially in the domain of biology do I feel as though I am talking face to face with God. Through life, I discover purpose even in a mechanical world. Science is the mystery of mysteries. It is the divine revelation of revelations.”

Emerson O. Bradshaw, *Unconquerable Kagawa*
(St. Paul: Macalester Park, 1952), 57–8.

賀川の敬虔（スピリチャリティ）の定義

「敬虔は宗教の本体である。その敬虔を過去現在未来に通じて理解する為に、我々は、今迄に考えた六種類の方法（自然、芸術、瞑想と祈り、歴史、労作、博愛）を用いるまでのことであつた。敬虔は、自己を単位としない生活そのものであり、絶対より有限の世界を見直す気持ちである。」

「宗教教育の本質」 『賀川全集』第6巻、295

「第三の曙への準備」

「敬虔の教育は、第三の曙に対する準備の教育でなければならぬ。。。その為に私は、宗教教育というものを敢て狭く区切らないで、全宇宙に広がる生命の可能性の感得に努力してきた。自然を通して宇宙進化と生命進化の方向を知り、芸術を通して、心理的可能性を納得し、瞑想を通して良心の可能性を学び、労働を通して人間努能力の可能性を、愛を通して人間建築の可能性を、そして宗教歴史を通して宇宙意志の可能性を観測してきた。敬虔の肝要はこれらの可能性に更に新しき可能性を加えるになる。即ち、人間が宇宙意志に同化し得るの可能性である。」

宗教教育の本質」 『賀川全集』 第6巻、296

賀川の人格主義と進化論

「進化の法則は善の所在地としての『我』のみに発見せられ、『我』は進化の法則と連絡を取つて、始めてその宇宙との連絡が理解出来るのである」。

「愛の科学」 『賀川全集』7巻、209頁。



近代都市文明 への大挑戦



「今日の時代において、自然ほど虐待されているものはない。殊に大都会が発達して、自然が見失われてゆくと、人間の性格までが変性してくる。。。私は都市を自然に関係あるものにつくりたい。」

「自然と性格」、『賀川全集』第6巻、435、436



『空中征服』

『空中征服』は諷刺物語として1922年（大正11）大阪日報に連載されたものを、12月に本として改造社から出版されました。

賀川は文章だけではなく、絵画にも腕を奮いました。「私は絵描きを志していれば相当な画家になれた。私は描こうとする影像が、まだ描かないうちに眼前に浮かんでくる」と賀川本人が言ったことがあるそうですが、物語は賀川の挿絵によって生き生きと描かれます。大阪市の煤煙を憂えた賀川が、夢の中で大阪市長になって市政改革に着手するという筋書きですが、太閤秀吉や大塩平八郎が議場に傍聴に来て賀川支持の演説をぶったり、空中村や人間改造機が登場したり。夢から覚めると、南京虫に食われていた、という落ちがつきます。

この物語は、痛烈な文明批評に貫かれ、フェミニズム、資本主義攻撃、官僚主義批判などが次々と繰り出されますが、ユーモアあふれる筆致で決して嫌みに陥らず楽しく読める1冊です。





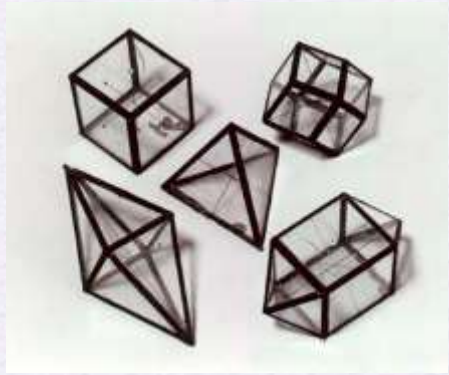
松沢幼稚園一
賀川の「実験校」
1931年から



自然の「恩物」
鉱物→植物→動物→天体
「フレーベル館」という博物館







芸術的側面

「幼児に粗雑な観察をさせてはならない。そして実物に出来るだけ似た特長をつかませることが必要である。そして塗絵，切抜き，折紙，貼り紙などをする場合，自然のまゝの美を恩物化することが大事である。(…)自然界は葉序の持つ美的法則を守っているから美しく見えるのである。そういう美的法則を手工を通して子供に教えておきたいのである。」⁴²⁾

「それ（自然の実物：引用者注）を系統的に，特長あるものを頭に入れ，連想させ（…）他との比較を教える。それから，総合的に，例えば，動物植物の進化，全体の位置などを考える。それをまた成長的に，選択させて，名を教える。（…）また連想させたり，記憶させたりすること，判断させることなどは必要なことである。」⁴⁹⁾

「社会生活を研究させるためにも、蜜蜂や蟻を飼っているうちに、母性愛も、互助愛も、その他胎生の研究、共生の研究などもいろいろのことを、知らないうちに覚える。」⁵⁷⁾

「幼児自然教案」、469

「植物も昆虫も魚も魚も不思議に支えられている事実をみて、深い神の恩寵と感謝するようになる。この意識から弱き者に奉仕する精神が湧いて来るのである。」⁵⁹⁾

「教育革命とキリスト教精神」、17

「敬虔による宗教教育」

- (1) 神聖への教育
- (2) 宇宙意志への同化
- (3) 信仰の教育
- (4) 救に就いての教育
- (5) 宇宙愛に就いての教育
- (6) 拝むことの教育
- (7) 環境と敬虔の教育

「宗教教育の本質」、294-302

『宇宙の目的』、昭和33年



「太平洋戦争が始まる少し前から、私は宇宙悪の問題を宇宙目的の角度より見直し、宇宙の構造に新しい芸術的興味を感じるようになった。私は宇宙の構築に神秘的発展が、まだ進行中であることを深く感じる。それで、私は、それに結論を出すことをいそがないで、宇宙の一大演出をただ見ておきたいと思う気がする。しかし、私があまりひとりで考え込んでいることも周囲の人々にすまないなので、私の宇宙の見方の一端をここに発表し、宇宙芸術の味わい方を世界の人々に知ってもらいたいと思うのである。」

「序」から

宇宙悪よりの解脱救済の道

インドの虚無思想、西欧の有神的救済の道、と近代科学思想

「宇宙悪よりの解脱救済の道を、昔から人間は三つの角度から考えた。第一はインドの宗教の形式、すなわち、虚無思想である。第二は西欧思想として発達した有神的救済の道である。第三は近代科学思想による宇宙悪の追放である。

私は、この三つの思想はたがいに対立するものでないと思う。これらは人間の意識の上に発生するものである。西田幾多郎博士は、「無」の思想の意識的効用を認めた。代数的に中世紀のクザのニコラスもこの「零」を認めた。近代量子力学のハーマン・ウィルもクザのニコラスと同じ思想をもっている思想家である。虚無は排除してよいが「零」を選択として使用し、思想としての宇宙悪を除去せよと私はいう。また第三の科学的悪の追放も、近代的意味において極力努力する必要があると思う。」

賀川の宇宙目的論の結論

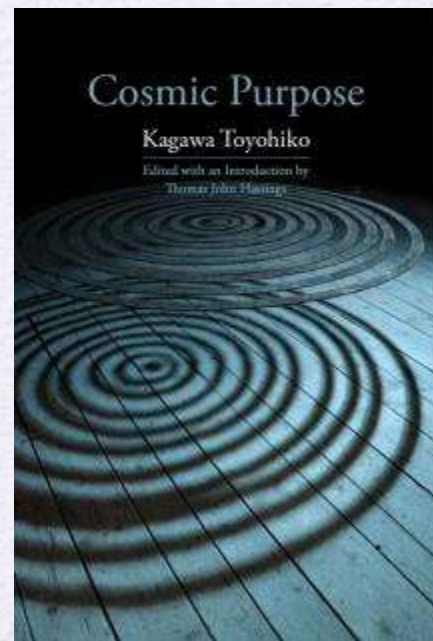
- (1) 宇宙に目的がある。
- (2) 宇宙の目的は「生命」の方向に向いている。
- (3) 「生命」の目的は「心」(意識)のほうに向いている。
- (4) 個性の「心」は社会的、組み立てのほうに向いている。
- (5) その組み立ての社会的「心」は歴史的進化発展と宇宙意識の覚醒の途上にある。
- (6) それは宇宙の創造進化を可能ならしめた精神の助力を待つ方向に向いている。

「神々をつくるための機械である宇宙」

「事実、よろこびは、拡散した神秘的直感が世界中に伝播させる、生の単純さのことであろう。よろこびとはまた、拡大された科学的経験のなかで、彼岸の幻視のあとに自動的に続く単純さのことであろう。これほど完全な精神的革新が行われない場合には、さまざまな切りぬけ策に訴え、ますます侵入してくる「統制」に服し、障害物-われわれの本性が文明に対してさし向けている障害物-一つ一つ避けねばならないだろう。他が、抜本的な方策をとるにせよそうでないにせよ、どうしても決断することが必要だ。人類は自らなしとげた進歩の重荷（おもに）の下で、半ば押し潰され、呻いている。人類は、自分の未来が自分次第だということを十分に知っていない。人類はまず、自分が生き続けようとするか否かを見てみることだ。次に人類が自ら問うべきことは、自分はただ生きることを欲しているのか、それとも、そのほかに、宇宙-神々をつくるための機械である宇宙の一本質的機能が、反抗的なわが地球上でまでも、遂行されるに必要な努力を惜しまないのかどうか、ということである。」

「全意識的に発達して、全人類が、世界平和に協力し、戦争に使用するエネルギーを世界協同体の組織運動に回し、余剰勢力を発明発見に回すことができるならば、人類の幸福これにすぐるものはないと私は思う。」

『宇宙の目的』 3 4 4



「全人類への愛」

「かれ（偉大なキリスト教神秘家）を焼尽つくす愛は、もはや単に、神に対する一人の人間の愛ではなく、すべての人間に対する神の愛だからである。かれは、神を通して、神によって、神的愛で全人類を愛する。」